

知恵ある人の教えは命の“いずみ”である。(箴言13章14節)

編集：愛宕町教会・総務部 発行者：矢野俊介 発行所：甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyokai/>

みことば

キリストの内に造られ

聖書 エフェソの信徒への手紙 第2章1～10節

牧師 矢野 俊介

さて、あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです。(1節)

「自分の過ちと罪のために死んでいた」とは、どういうことでしょうか。端的に言えば、これは霊の死のことを指していると言えます。わたしたちはふだん死の事柄を肉体の死であると受け止めています。

しかし、人間は肉体だけが生きるわけではありません。創世記2章には、最初人間アダムが土の塵で体を形造られ、その鼻から命の息を吹き入れられて生きる者となったと語られています。ここで「息」と訳されている言葉(ヘブライ語の「ルアハ」)は「霊」というふうにも訳される言葉です。人間は肉体と霊とを兼ね備えて生きて行くのです。

肉体の中から命の息である霊が抜けてしまうと、もはや体は生きることができず、土の塵に戻って行きます。霊が肉体から離れば体は死にますが、しかし肉体の中にあつて、霊が死ぬ

こともあり得るのです。わたしたちの霊が、本来の命の源である神様から離れてしまえば、霊はもはや本来の形を保てなくなります。

最初の人アダムが神様の勧告に背いて善悪を知る木の実を食べたところから、罪と死が人間の人生に入り込みました。そのとき以来、わたしたち人間は「自分自身の過ちと罪のために死んだ」者となって歩むようになったのです。

ところが、神様は、そんなふうに人間たちがいつまでも死んでいることを良しとはなさいませんでした。主イエス・キリストを救い主として送り、この方に伴われて生きるようにしてくださったのです。

★

罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、あなたがたの救われたのは恵みによるのです——キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。(5節、6節)

「罪のために死んでいたわたしたち」という言葉は、1節を受けています。しかし、ここでは罪による死が逆転され、死から命への復活が起きていると告げられています。それは、わたしたちが自分の力や信心の深さによって生き返るものではありません。「キリスト・イエスによって共に復活させ」と言われているように、キリストによって、そのよみがえりに一つに合わされて復活させられるのです。

「霊の死」とか、その死からの復活と言われてもイメージしづらいかも知れませんが、たとえば脳死の場合、死んでいても心臓は動き、肉体も反射行動を起こします。体が動くので、家族は愛する者の死をなかなか受け入れにくいのですが、霊の死にも似たようなところがありま

を求めるような生き方をしたがりません。それは、神様からご覧になれば、死んでいるのです。わたしたちの罪のため十字架の上に死んで罪を清算し、よみがえられた主イエスに合わされて、主イエスに従い、神様に喜ばれることを願って生きる生活こそ、新しい命に生きる生活です。わたしたちはキリストに合わされ、キリストの内に生きる者とされたのです。

★

なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。(10節)

「キリスト・イエスにおいて」という言葉は、英語では「By Jesus Christ」です。「キリストの内に」と訳しても良い文章です。

わたしたちの生活は、キリスト・イエスの内にあり、キリスト・イエスのために生きる生活です。どこへ行っても、わたしたちはキリストの内に置かれ、そこで善い業をするように、神様が用意を整えてくださるのです。神様が用意してくださる善い業に存分に仕え、歩む者とされたいと願うのです。

御言に聴き、待ち望む

旧約聖書 ハバクク書 第1章

ハバククの憂いを含んだ祈りに学ぶ

《講師》 宍戸 俊介 牧師



2016年教会全体研修会
3年連続研修会（2016年～2018年）

2016年9月25日（日） 礼拝後

講師よりのメッセージ

今回の3年連続研修会では、旧約聖書のハバクク書に聴きながら、捕囚前後の困難な時代の中にあつて、神様からハバククが聞かされた語りかけを、私たちも聞き取りたいと願います。今日の状況は、イスラエルがバビロンに捕囚されたのと同じというのではありません。しかし、コリント伝道中のパウロが困難な伝道生活を御言に励まされ歩んでいたように、私たちも神様の御言に励まされて伝道する教会のあり方を整えられたいと願うのです。

ハバクク書の構成

木田献一教師（元山梨英和学院院長）による

《1章1節～2章4節》

預言者（ハバクク）の祈りと主（ヤハウェ）の答え

《2章5節～20節》

高ぶる者（カルデヤ人）の罪

《3章1節～19節》

讚美の歌

3年目

2年目

1年目

講演レジュメ

時代背景 木田献一師による

ハバククが預言活動を始めたのはアッシリア帝国の末期から新バビロニア帝国が覇権を握る時代の転換期であつた。歴代誌下34章の記録を見るならば、ヨシヤ王が8歳で即位し（紀元前640年）、その治世の8年目（紀元前632年）に父祖ダビデ王の神様を求めることを始め、治世12年（紀元前628年）にユダとエルサレムの異教的象徴の撤去を始めたと言われている（歴代誌下34・3）。

この年は、アッシリア最盛期の王アッシュルバニパルが没する一年前であつた。王の没後、アッシリアは退潮し始め、代わってバビロニアが勃興し覇権を握る。このバビロニアによって南ユダ王国は敗北し、バビロン捕囚（紀元前587年）が実現することになる。

預言者ハバクク

預言者ハバククが、幻で示された託宣。（ハバクク書1章1節）

旧約聖書の中で「預言者」という肩書が書き込まれるのは、このハバククの他はハガイとゼカリヤだけ。ハガイとゼカリヤは捕囚からの解放以後の預言者だが、ハバククは捕囚以前の預言者。この肩書はハバククがエルサレム神殿の祭儀に参加して御言葉を取り継ぐ祭儀預言者だったことを表している。

ハバククと同時代の預言者はエレミヤ。エレミヤは在野の預言者であり神殿の庭に立つて礼拝に行く人々に向かってエルサレム神殿の滅亡を預言した（エレミヤ書26章）。

エレミヤと比較すると、ハバククは王や人々に向かっては一切語らない。彼は「沈黙の預言者」——これはユニークな存在。ハバククの立場（祭儀預言者）が語れなくさせていると受け取ることができる。ハバククの仕事は時代の苦悩を祈りながら魂に受け止めること。

「ほかの預言者たちの場合と違って、ハバククは四つ辻や広場、あるいは、民の集会や王のように高貴な人の前で語ったり証したりする任務を、神から与えられていなかったように見えます。彼が遭わされたのは、むしろ、時代の苦悩を、祈りながらその魂に受け止めるためでした。ハバククといえど、祈りつつ詩編を歌い上げた人々にたいそう似かよった人物のように感じられ、ヨブとそう隔たった人でないようにさえ思えます。彼は、まさしく、預言者の中の祈りの人と呼ばれるのにふさわしいような人物です」（リュティ）

「幻で示された託宣」——幻に示された内容は5節以下に語られる。イスラエルの審判。

ハバククの祈り（嘆き） 1

主よ、わたしが助けを求めています。

んでいるのに、いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。わたしが、あなたに「不法」と訴えているのに、あなたは助けてくださらない。どうして、あなたはわたしに災いを見させ、苦労に目を留めさせられるのか。（ハバクク書1章2節）

●ハバククが最初に神様に祈る祈りは、「いつまでわたしたちの叫びを聞いてくださらないのか」という叫び。ヨブ記のヨブが嘆きながら神様に訴えている言葉とよく似ている。また、「いつまで」と嘆きながら問う詩編13編の詩人の言葉にも似ている。

だから、不法だと叫んでも答えはなく、救いを求めても、裁いてもらえないのだ。（ヨブ記19章7節）

いつまで、主よ、わたしを忘れておられるのか。いつまで、御顔をわたしから隠しておられるのか。いつまで、わたしの魂は思い煩い、日々の嘆きが心を去らないのか。いつまで、敵はわたしに向かって誇るのか。（詩編13編2節～3節）

●ハバククの祈りは一人称単数で祈られている。だが、ハバククは個人的な助けや救いを祈り求めているのではなく、南ユダ王国の時代状況の中から救いを求めている（「わたしが助けを求めて叫んでいるのに」「わたしが、あなたに『不法』と訴えている」「あなたはわたしに災いを見させ」）。

●ハバククが叫ばずにおれなかった時代の苦悩、それは、神様に信頼せず、安易にアッシリアの力にすり寄ろうとする南ユダの為政者たち。

★マナセ(55年)異教礼拝を実施。しかし晩年は悔い改め立ち返る。

★アモン(2年) マナセの子。異教礼拝を実施。謀反により殺害。

★ヨシヤ(31年) 礼拝から異教的な要素を除去。エジプト王ネコと戦い戦死。

★ヨアハズ(3か月) ヨシヤの子。エジプト王ネコの圧力により退位させられる。

★ヨヤキム(11年) 再び異教礼拝を実施。バビロニア王ネブカドネツアルにより捕囚。この後、子ども王ヨヤキン(8歳で即位、3か月と10日)、その兄弟ゼデキヤの治世(11年)を経て全ユダのバビロン捕囚へ。

ハバククが生きているのはヨヤキム治世下のエルサレム。そこでマナセ王時代以来の歴史を思いつつ、祭儀預言者の務めと向き合っている。

だが、いったい何が語れるというのか。語る者として行き詰まるハバクク。

●祭儀預言者の務めは、神殿礼拝をささげた後、神様の赦しと慈しみを語ること。ところがハバククは、神様が慈しみ深い方であることにはや確信が持たなくなっている。

暴虐と不法がわたしの前にあり

争いが起こり、いさかいが持ち上がっている。(ハバクク書1章3節)

力づくの暴力が横行し、法は守られない。「暴虐と不法がわたしの前にある」ということは、全くの無法状態に陥っているということ。そのような状況の中で、ひたすら神様に祈り、その答えを聴き取ろうとする者として立っている。

主はマナセとその民に語りかけられたが、彼らはそれに耳を貸さなかった。そこで主はアッシリアの王の將軍たちに彼らを攻めさせられた。彼らはマナセを鉤で捕え、一對の青銅の足枷につないでバビロンに引いて行った。(歴代誌下33章10節〜11節)

律法は無力となり 正義はいつまでも示されない。神に逆らう者が 正しい者を取り囲む。たとえ、正義が示されても曲げられてしまう。(ハバクク書1章4節)

●この4節はヨヤキム治世下の状況と符合する。「神に逆らう者」と言われているのは、傾きかけているアッシリアに従おうとする者たちであり、「正しい人」と言われているのは、正しい王であるヨシヤとヨシヤの改革を継続しようとしたヨアハズを表現している。

神様の答え1

諸国を見渡し、目を留め 大いに驚くがよい。お前たちの時代

に一つのことが行われる。それを告げられても、お前たちは信じまい。見よ、わたしはカルデヤ人を起こす。それは冷酷で剽悍な国民。地上の広い領域に軍を進め 自分のものでない領土を占領する。(ハバクク書1章5節〜6節)

●神様は「告げられても、信じられないようなこと」をユダの上に行われる。

それを告げられても、お前たちは信じまい。見よ、わたしはカルデヤ人を起こす。

カルデヤ人とはアッシリアやバビロニアの人々を言い表す呼び名。ヨブ記の1章でヨブの財産であるらくだの群れをすべて略奪したのがカルデヤ人。

彼が話し終わらないうちに、また一人来て言った。「ご報告いたします。カルデヤ人が三部隊に分かれてらくだの群れを襲い、奪って行きました。牧童たちは切り殺され、わたしひとりだけ逃げのびて参りました。」(ヨブ記1章17節)

神様は、カルデヤ人が来るがままになさるというのではない。神様自らが、「カルデヤ人を起こす」とおっしゃる。だから、ユダの人々にとつては、「告げられても信じられない」ことになる。ユダの神であるはずの方が、ユダを滅ぼすための侵略者を起こすと宣言されている。そのカルデヤ人の勇猛さ、凶暴さについては7節〜11節のよう

に宣言される。

彼らは恐ろしく、すさまじい。彼らから、裁きと支配が出る。彼らの馬は豹よりも速く、夕暮れの狼よりも素早く、その騎兵は跳びはねる。騎兵は遠くから来て 獲物に襲いかかる鷲のように飛ぶ。(ハバクク書1章7節〜8節)

ユダの人々は、素手で猛獣に立ち向かうようなことになる。初代教会のクリスチャンたちが羊の皮を着せられ、ローマの円形競技場に引き出されて猛獣と戦わされるという見世物にされた時代があったが、神様は歴史の中で、まさにそのようなさると宣言される。

●ハバククは、神様の赦しと慈しみを確信できないため、王や民の前で語るべき言葉を見出せず、行き詰っている。そんなハバククに、神様はまるで逆の將來をお示しになる。ユダの敗北と滅亡がそれである。しかも、その裁きを異邦人であるカルデヤ人、神を恐れず自分の力を神とするような民に任せて実行させると宣言なさるのである。この神様のお答えを聞いて、ハバククは再び祈らずにはいられなくなる。

ハバククの祈り2

主よ、あなたは永遠の昔からわが神、わが聖なる方ではありませんか。我々は死ぬことはありません。(ハバクク書1章12節a)

●まことに神様の返事のおりですと、ハバククは納得することができない。

ハバククは神様の永遠性、不変性を土台として祈り続ける。「あなたはユダの神であり、これまで常に慈しみをもってユダの民を顧みてくださっていた。それなのにどうして目下の状況にユダを追いつめたのか」という問いがまず込み上げる。

そして、その問いと嘆きの中で、一つの答えに行きつくことになる。即ち、目下の試練と困難は、神様の懲らしめであり、ユダの民が神様の民らしいあり方に立ち返るための出来事であるという答えに行きつく。

主よ、あなたは我々を裁くために 彼らを備えられた。岩なる神よ、あなたは我々を懲らしめるため 彼らを立てられた。(ハバクク書1章12節)

●しかし、懲らしめにしては程度があまりに酷いと感じるハバククはまた神様の御心が分からなくなる。13節は、1章の鍵となる節。

あなたの目は悪を見るにはあまりに清い。人々の労苦に目を留めながら 捨てて置かれることはない。それなのになぜ、欺く者に目を留めながら黙っておられるのですか。神に逆らう者が自分よりも正しい者を呑み込んでゐるのに。(ハバクク書1章13節)

●「人々の労苦に目を留め…」



↓どうして、あなたはわたしに災いを見させ、労苦に目を留めさせられるのか。(3節) 従ってこの「労苦」は通常の仕事の苦労などではなく、ユダが被っている「災い」による労苦(この「災い」という文字は他に「邪悪・不義・罪」と訳すこともできる。自然災害ではない)。

神様は本来ならば、カルデア人の災いで労苦するユダを憐れまれるはずだ！

「カルデア人」＝「神に真つ向から逆らう民」彼らに比べればユダの人々はまだましなはずなのに…(ただし、ユダの「正しさ」はカルデア人に比べて相対的なものでしかない。本来は正義においては異質なほど違っているべきなのだが、ユダの人々も邪なので、「より正しい」

という言い方しかできない)。

●沈黙する神にとまどうハバククーしかし考えてみると、神が沈黙しておられるがゆえに、ハバククも語ることができないのである。それなのになぜ、…(あなたは)黙っておられるのですか。このハバククの問いは、実は十字架上の主イエス・キリストが発した問いでもある。「エリ・エリ・レマサバクタニ」(わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのか)＝「神の沈黙、沈黙する神」

●14節～16節はカルデア人がユダ人を「呑み込んでいる」ことの告発

あなたは人間を海の魚のように治める者もない、這うもののようににされました。(ハバクク書1章14節)

「人間を」と言っているが、これはユダの人々を指す。ユダ人が海の魚のようにカルデア人の捕虜とされ、命を絶たれ、あるいは奴隷とされて行く。囚われるユダ人が「海の魚」「治める者なし」「這うもの」に例えられている。

「海の魚」＝投網に入る魚たち
カルデア人たちの崇める神の道具が「投網」。カルデア人は投網によって世界を手繰り寄せることができると考えていた。↓彼らはその網にいかにかえをさせ、投網に向かって彼らは豊かな分け前を得

食物に潤うからです。(16節) この「投網」は現実には暴力(軍事力)の象徴。ユダはその網に捕えられる。

「治める者なし」＝神様との隔絶した状態を言い現わす。あなたの統治を受けられなくなつてから、あなたの御名で呼ばれない者となつてから、わたしたちは久しい時を過ぎています。どうか天を裂いて降ってください。(イザヤ書63章19節)

「這うもののように」＝へびを指す。神様の呪いを受けた生き物。

神の答え2

●もはや語ることのできないハバククは、黙つて歩哨の部署につく。彼の祈りに神様がどのように答えてくださるかを見極めようとした。

主はわたしに答えて 言われた。
「幻を書き記せ。走りながらも読めるように。板の上にはつきりと記せ。定められた時のためにもう一つの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなつても 待つておれ。それは必ず来る。遅れることはない。見よ、高慢な者を。彼の心は正しくあり得ない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」(ハバクク書2章2節～4節)

ハバククは、エルサレム神殿の祭儀預言者であり、神様の赦

しと祝福を伝えたいと願っている。その彼に、神様はもう一つの他の幻を示される。「高慢な者」(アッシリアとバビロニア)滅亡の幻。

それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなつても待つておれ。それは必ず来る。遅れることはない。見よ、高慢な者を。彼の心は正しくあり得ない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。

●最後に出てくる「神に従う者」と訳されている語(ヘブライ語「ハツァディク」)は1章4節にも登場。そこでは神に逆らう者たちに取り囲まれて万事休している「正しい者」と訳される。

つまり、1章4節で神様に逆らう邪な者たちに取り囲まれ、糾弾されている人がどうやって生きるのかと言うと、2章4節で「信仰によって生きる」というあり方をしていくことになる。

●「正しい人(＝神に従う人)」は、ハバククの見限る限り邪な者たちに打倒されているようにしか思えない。どこに救いがあるのか、ハバククは思い悩む。ユダの中に正義が確立されないどころか、さらに神を畏れない高慢なカルデア人によって、ユダは蹂躪されてしまう。

神はしかし、最後に高慢な民を裁かれる。その時まで、正しい人々は忍耐して信仰によって

まだ見ぬ将来を確信して生き続ける者になるのである。

終わりに

去年の研修会で、教勢の数字に一喜一憂するのではなく聖書の中に教会の歩むべき伝道モデルの姿を見出すべきことを申し上げた。

今日の箇所ではどのようなことが述べられているだろうか。ハバククは南ユダ王国がアッシリア、次いでバビロニアに撃ち破られて行く現場に立ち会い、なすすべもなく網に捕えられ、鉤によって吊り上げられ引き立てられて行くマナセやヨヤキムの姿を目の当たりにする。

しかし、そういう現実を目の当たりにしながらなお、高慢な者が永続するのではなく、そこに必ず次の時代がやってくるとを信じるように神様から求められている。

ハバククが書き記すように求められた「もう一つの幻」＝カルデア人への裁き」は来年の研修会で学ぶことになる。どんなに勢力を誇り繁栄しているように見えていても、この世の勢力は潰れるのである。

時代が大転換し激動する時には、今までと同じことが続かなくなる。しかし、神様はなお将来を備えておられる。神様のなさりようを待ち望みつつ希望を持って過ごす群れとされたいと願う。

壮年会

松沢教会との交流会

壮年会長 弓田覚志

10月10日、愛宕町教会前任の北紀吉牧師が赴任された松沢教会の壮年会との交流会が行われた。昨年は愛宕町教会から16名で松沢教会に伺い、想像以上の手厚いおもてなしをいただき、甚だ恐縮しつつも楽しい交流会をさせていただいた。その際、松沢教会の壮年会の方々から、来年は是非愛宕町教会で交流会をという話をいただき、それを実現する運びとなった。

当日は、次週がバザーということで婦人会の方々はケーキ作り。頭には昨年以上のおもてな



しをしなくては、まして松沢教会の方々は昨年こちらから伺った人数より多い、23名の壮年、婦人な方々が来られる。そんなプレッシャーの中、特に古屋秀樹兄と打ち合わせをしながら、13時15分の礼拝から会が始まった。説教は穴戸俊介牧師の「キリストの内に造られる教会（エフエソの信徒への手紙2・1・10）。礼拝後、全体写真を礼拝堂で撮った後、かいてらす買い物コース、甲州夢小路・甲府城の甲府の歴史をたどるコースの2班に分かれ行動。15時25分岡島ローヤル会館で行われた懇親会で、再び合流し、教会近況報告、一人一人の自己紹介を交えながら、おいしい料理、飲み物を堪能した。特にこちらが用意した、山梨県産のワインは非常に好評で、松沢教会の方々も顔を真っ赤にしなが、数種類のワインを味わっておられた。

一部宿泊された方を除き、19時前のかいじで帰京。その後いただいたメールや寄せ書きで、とても喜んでいただいた様子にホッとした。

それも皆が主イエス・キリストの枝に繋がっていたから行えたこと。神様に感謝です。

教会学校と合同礼拝

説教「サウル王のしっばい」

サムエル記上 第15章1～3節、7～9節

“大人と子供の合同礼拝”に思う

教会学校校長 渡邊春美



最前列に座って、共に礼拝する教会学校生徒たち

10月16日の主日礼拝は教会学校の子供達と、いつも親子で礼拝に出席している子供達も加わって、共に礼拝を守る事ができました。

“神はそのひとり子を十字架につけて、招かれる私たちすべての子どもを”と、礼拝の中で讃美歌21の69を讃美しました。神様は礼拝に老若男女、子供も大人もすべての人達を招いて下さっている事を実感しました。礼拝の中でのお話は、穴戸牧師が教会学校でのお話のプログラムを崩さないように配慮して下さり感謝しています。これからの教会を担っていく子供達にとって貴重な経験になった事と思います。

ただ、子供達に週報が手渡されていなかったり、祝祷の時に幼い子供達が前に出なかったりと残念に思う事もありました。初めての試みで、大人の側の不手際もあり、子供達もまだ慣れていない事もあり、ぎこちなさが残る点もありましたが、将来に向けての第一歩を踏み出したとの思いで感謝しています。

子供達の信仰を養って下さるのは神様、そしてそのお手伝いをしていくのは教会全体の務めですから、これからも合同礼拝を充実させていくと同時に、年に何回か実行していただけたら良いと思っています。

礼拝堂の放送設備、新システム導入のお知らせ

司会者・説教者の声が聞こえにくい方・マイクの音だけに集中して聞きたい方は、ぜひお試しください。

この度、難聴者向けラジオマイク老朽化に伴い、礼拝堂の放送設備に新システムを導入し、礼拝堂のマイクからの音をFMラジオから拾えるようにしました。FMラジオをお持ちであれば、どなたでもご使用になれます。FMラジオをお持ちでなくお試しになりたい方は、教会にラジオの用意がありますので、牧師・役員までお申し出ください。

FM ラジオ
礼拝堂内周波数は
85.0MHz



3F ギャラリーに設置したFMトランスミッター

2016年度夏期伝道実習報告

愛宕町教会での夏期伝道実習

東京神学大学4年 内田 光生



祈りに支えられて

4週間の夏期伝道実習を無事に終えることができたのは、穴戸俊介・尚子両牧師の祈りと愛宕町教会の皆様のお祈りがあったからです。主日礼拝で、家庭集会で、第2祈祷会・第3祈祷会で、祈りの小団で、私のために祈って戴き、心より感謝しています。

今回の実習で得たことは、「牧師は、教会員の皆様のお祈りによって支えられている」ということです。

横浜磯子教会でも私のために祈りをささげて下さっていました。横浜磯子教会の週報の祈りの課題に「内田神学生の夏期伝道実習のために」と掲載され、礼拝で祈って下さいました。

多くの人々に支えられ、実習ができ、たくさんの学びをすることができました。

説教は証ではない

7月24日夕拝の後、穴戸牧師にご指導して戴いたことは、「説教は、証ではありません。夕拝の説教は質のいい証でした。」ということでした。「み言葉が何を語ろうとしているのかを誠実に読み取って下さい」と助言を戴きました。

次の日、牧師館で次のようなことを教えて下さいました。

1. 原典のギリシャ語をノートに書き移しましょう。
2. 自分なりのギリシャ語訳を書いてみましょう。
3. 注解書を3～4冊読みましょう。
4. そのことをやった後、自分でもう一度聖書を読み、聖書が何を語ろうとしているのか、ノートに書いてみましょう、ということでした。

また、説教や家庭集会では、「ギリシャ語ではこう言います」という話し方はしないようにというご指導もありました。牧師館から、ギリシャ語の辞書、注解書を貸して戴いて、早速家庭集会10回と8月22日の主日説教の準備が始まりました。自分の時間がある時は、ほとんど聖書研究をしていました。余裕はまったくありませんでした。牧師になったら、これよりもっと忙しく、余裕がないのだらうなと思われました。

自分なりの聖書研究はするのですが、聖書が何を語っているのか、なかなか把握できませんでした。パウロは、このみ言葉で、この文章で、この章で、このコリントの信徒へ手紙一で一体何を言いたいのかが理解できませんでした。注解書を読んでいても、私の問いに答えてくれません。

家庭集会で

正直な話をさせて戴きますと、家庭集会は厳しく、苦しいものでした。というのは、喜びの福音を伝えようとしたのですが、み言葉が何を語ろうとしているのか、自分が十分理解していない状況で、そのみ言葉を語らなければならないことが苦しかったです。家庭集会でお話をする前は、いつも胃が痛くなりました。

私が話をした後、穴戸牧師が分かりやすくみ言葉を解き明かして下さいましたので、私としては大変助かりました。穴戸牧師が話しておられる時の参加者の表情は、とても良く、み言葉が心に響いているようでした。

10回目の家庭集会で、初めてみ言葉が何を語ろうとしているのかが把握でき、少し余裕を持って話すことができました。今までの穴戸牧師のご指導と家庭集会での皆様方の質問の賜物だと思っています。

家庭集会をご提供して下さいました各ご家庭に心より感謝致します。ご準備本当に大変だったと思います。

教会学校で学んだこと

教会学校キャンプで教えられたことがあります。それは、分級の方法でした。「出エジプト」をテーマに、子ども達の発達段階を考慮して、取り組んでいたことはとても参考になりました。家族全員でキャンプに参加できるプログラムを用意することの大切さを学びました。ただ作業をするだけでなく、発表の時の持ったこともいい方法だと思いました。

教会学校の礼拝において、子ども達一人ひとりに聖句や暗唱聖句を言わせていることがとても大切だと感じました。

最後に

初めて愛宕町教会の礼拝に来られた方のためにお祈りすることは素晴らしいと思いました。私も7月24日の礼拝の時に、穴戸牧師よりお祈りして戴きました。とても感銘を受けました。今まで全国20カ所位で礼拝に参加しましたが、初めて来た方のためにお祈りをしている教会は愛宕町教会が初めてでした。また、その月の誕生者と永眠者の紹介とお祈りすることは、教会員一人ひとりを大切にしている教会だなと強く感じました。

愛宕町教会で夏期伝道実習ができたことを心より感謝致します。少し自信をつけさせて戴きました。残された神学生の時を大切にしようと思いました。

愛宕町教会の皆様お一人お一人に神様の豊かな恵みがありますようにお祈り致します。